

若年層献血意識に関する調査結果の概要（案）

I 調査の概況

1 調査の目的

近年、献血者数は減少傾向にあり、特に若年層の献血者の減少が著しい。

これに加え、平成17年2月、国内で初めて変異型クロイツフェルト・ヤコブ病（vCJD）患者が確認されたことから、輸血を通じたvCJDの伝播を防ぐための献血制限の強化等により、血液製剤の安定供給の確保に支障を来すおそれが生じている。

こうした中、少子高齢化に伴う献血可能人口の減少など、将来にわたって安定的に血液製剤を供給していくためには、若年層献血者の確保を図ることが重要であることから、若年層の献血に対する意識を把握し、献血推進方策等を検討する上での基礎資料を得ることを目的として本調査が実施された。

2 調査の対象者

16歳から29歳の献血経験者及び献血未経験者

※ 献血経験者：過去に1度でも献血の経験がある者

※ 献血未経験者：今まで1度も献血の経験がない者（採血前の検査で基準を満たさないため献血できなかった者を含む。）

3 調査の時期

平成18年1月20日～2月3日

「はたちの献血」キャンペーン期間中

4 調査の方法

委託先調査会社が保有している一般消費者パネルに対して、インターネットを通じて調査票を送付し、地域区分ごとに一定数に達するまでの回答を収集する。

5 調査の内容

調査の内容は、大別すると次の事項に分けられる。

- ① 献血に関する認知度や献血へのイメージについて
- ② 献血を行った時期やきっかけについて

6 調査票の回収状況

区 分	献血経験者	献血未経験者	合 計
北海道	2 0 0	2 0 0	4 0 0
東北	3 5 0	3 5 0	7 0 0
関東甲信越	1 , 8 0 0	1 , 8 0 0	3 , 6 0 0
東海北陸	7 5 0	7 5 0	1 , 5 0 0
近畿	8 5 0	8 5 0	1 , 7 0 0
中国・四国	4 5 0	4 5 0	9 0 0
九州・沖縄	6 0 0	6 0 0	1 , 2 0 0
合 計	5 , 0 0 0	5 , 0 0 0	1 0 , 0 0 0

II 調査結果の概要

1 献血未経験者

■ 基本情報（回答者 5 0 0 0 人）

- ① 性別では、男性が 1,688 人（33.8%）、女性が 3,312 人（66.2%）であった。
- ② 年齢別では、25～29 歳が 2,882 人（57.6%）、次いで 22～24 歳が 1,539 人（30.8%）、18～19 歳が 304 人（6.1%）、16～17 歳が 275 人（5.5%）であった。
- ③ 職業別では、会社員が 1,596 人（31.9%）、次いでその他が 999 人（20.0%）、大学生・専門学校生が 932 人（18.6%）、専業主婦が 856 人（17.1%）、高校生が 398 人（8.0%）、自営業が 115 人（2.3%）、公務員 104 人（2.1%）であった。
- ④ 医療関係従事者は 300 人（6.0%）であった。

■ 献血に関する認知度や献血へのイメージ

献血未経験者の4人に1人（26.2%）が献血を知らないと回答。

また、献血ルームのイメージについて、「明るい」が18.2%で「暗い」の20.6%とネガティブイメージが上回っていた。

Q 1 献血に関する認知度について、「ある程度知っている」が3,268人（65.4%）、「よく知っている」が421人（8.4%）で、献血を知っている者が全体の7割を超えていた。

Q 2 献血への関心について、「関心がある」が2,291人（45.8%）、「非常に関心がある」が318人（6.4%）で、献血に関心がある者が全体の5割を超えていた。

Q 3 献血に関する広報で接触したことがある媒体としては、「街頭での呼びかけ」が3,485人（69.7%）、次いで「献血バス」が3,261人（65.2%）、「テレビ」が3,006人（60.1%）であった。（複数回答）

Q 4 献血の呼びかけとして効果があると思った媒体としては、「テレビ・新聞・ラジオを使った呼びかけ」が2,569人（51.4%）、次いで「街頭や職場、学校等での呼びかけ」が1,921人（38.4%）、「献血に関するイベントでの呼びかけ」が1,167人（23.3%）であった。（複数回答）

Q 5 献血のキャンペーンを行う際の効果的な媒体としては、「テレビ」が4,445人（88.9%）、次いで「インターネット」が2,094人（41.9%）、「新聞」が1,409人（28.2%）であった。（複数回答）

Q 6 「氷川きよし」キャンペーン起用について、「テレビで見た」が1,465人（29.3%）、「ポスターで見た」が817人（16.3%）で、全体の5割が認知していた。

Q 7 キャンペーンキャラクターとして起用すべきタレントは、「上戸彩」が302人（6.0%）、「仲間由紀恵」が248人（5.0%）、「木村拓哉」が138人（2.8%）であった。

Q 8 「けんけつちゃん」の認知度は、148 人（3.0%）。職業別では、高校生 20 人（5.0%）が、また、地域別では、東北 14 人（4.0%）の認知度が高かった。

Q 9 献血キャンペーン（「愛の血液助け合い運動」、「私たちの献血キャンペーン」）の認知度は、「知っている」が 1,297 人（25.9%）で、「知らない」が 3,703 人（74.1%）であった。

Q 10 高校生向けの献血に関する普及啓発資材「HOP STEP JUMP」を配布された記憶について、「知らない」が 4,646 人（92.9%）で、記憶ありは 354 人（7.1%）であった。

Q 11 エイズ検査結果の非通知について、「知っている」が 1,460 人（29.2%）、「知らせていると思った」が 1,554 人（31.1%）、「そもそも検査していることを知らなかった」が 1,986 人（39.7%）であった。

Q 12 献血で感染症に感染しないことについて、「知っている」が 3,044 人（60.9%）、「知らない」が 1,956 人（39.1%）であった。

Q 13 血液製剤を未だ海外血液に依存していることについて、「知っている」が 1,132 人（22.6%）で、「知らない」が 3,868 人（77.4%）であった。

Q 14 献血ルームのイメージについて、「暗い」が 1,030 人（20.6%）で、「明るい」908 人（18.2%）を上回っていた。

■ 献血をしたことがない理由等

献血未経験者が献血しない 1 番の理由としては、

- ・ 針を刺すのが痛くて嫌だから（14.2%）
- ・ 何となく不安だから（6.5%）
- ・ 恐怖心（5.0%）
- ・ 血を採られているという感じが嫌だ（4.6%）

といった「採血の際の痛みや不安」が全体の 3 割を占めていた。

Q 1 5 献血をしたことがない理由として1番目に挙げられたもののうち最も回答が多かったのは、「針を刺すのが痛くて嫌だから」の711人（14.2%）であった。

また、献血をしたことがない理由を3つまで列挙してもらい、その中で挙げられた理由について見ると、「針を刺すのが痛くて嫌だから」が1,455人（29.1%）、次いで「何となく不安だから」が1,397人（27.9%）、「健康上出来ないと思ったから」が1,138人（22.8%）であった。

Q 1 6 献血するきっかけとなり得る理由として1番目に挙げられたもののうち最も回答が多かったのは、「献血しているところが入りやすい雰囲気になった」場合で865人（17.3%）であった。

また、献血するきっかけとなり得る理由を3つまで列挙してもらい、その中で挙げられた理由について見ると、「献血しているところが入りやすい雰囲気になった」場合が1,670人（33.4%）、次いで「針を刺すときに痛みを和らげる処置が実施された（麻酔など）」場合が1,379人（27.6%）、「献血が自分の健康管理の役に立つようになった」場合が1,287人（25.7%）であった。

2 献血経験者

■ 基本情報（回答者5000人）

- ① 性別では、男性が1,705人（34.1%）、女性が3,295人（65.9%）であった。
- ② 年齢別では、25～29歳が3,699人（74.0%）、次いで22～24歳が1,111人（22.2%）、18～19歳が145人（2.9%）、16～17歳が45人（0.9%）であった。
- ③ 職業別では、会社員が2,099人（42.0%）、次いで専業主婦が1,067人（21.3%）、その他が749人（15.0%）、大学生・専門学校生が652人（13.0%）、公務員203人（4.1%）、自営業143人（2.9%）、高校生87人（1.7%）であった。
- ④ 医療関係従事者は500人（10.0%）であった。

■ 献血に関する認知度や献血へのイメージ

「街頭での呼びかけ」や「献血バス」に出会ったことがあるとした割合が多く、ともに7割を超えていた。

献血の呼びかけとして効果があると思った媒体は、「テレビ・新聞・ラジオを使った呼びかけ」57.8%と最も高く、次いで「街頭や職場、学校等での呼びかけ」49.1%であった。

献血ルームのイメージについて、「明るい」が42.1%で「暗い」の8.3%を大きく上回っていた。

Q 1 献血に関する広報で接触したことがある媒体としては、「街頭での呼びかけ」が3,910人(78.2%)、次いで「献血バス」が3,765人(75.3%)、「テレビ」が3,330人(66.6%)であった。(複数回答)

Q 2 献血の呼びかけとして効果があると思った媒体としては、「テレビ・新聞・ラジオを使った呼びかけ」が2,888人(57.8%)、次いで「街頭や職場、学校等での呼びかけ」が2,457人(49.1%)、「献血に関するイベントでの呼びかけ」が1,619人(32.4%)であった。(複数回答)

Q 3 献血のキャンペーンを行う際の効果的な媒体としては、「テレビ」が4,375人(87.5%)、次いで「インターネット」が2,195人(43.9%)、「新聞」が1,521人(30.4%)であった。(複数回答)

Q 4 「氷川きよし」キャンペーン起用について、「テレビで見た」が1,763人(35.3%)、「ポスターで見た」が1,544人(30.9%)で、全体の7割弱が認知していた。

Q 5 キャンペーンキャラクターとして起用すべきタレントは、「上戸彩」が285人(5.7%)、「仲間由紀恵」が221人(4.4%)、「木村拓哉」が155人(3.1%)であった。

Q 6 「けんけつちゃん」認知度は、350人(7.0%)。地域別では、「東北」が46人(13.1%)で他の地域と比べ高く、職業別では、「高校生」が17人(19.5%)で他の職業に比べ高かった。

Q 7 献血キャンペーン（「愛の血液助け合い運動」、
「はたちの献血キャンペーン」）の認知度は、「知っている」が 2,322 人（46.4%）で、「知らない」が 2,678 人（53.6%）であった。

Q 8 高校生向けの献血に関する普及啓発資材「HOP STEP JUMP」
を配布された記憶について、「知らない」が 4,470 人（89.4%）
で、記憶ありは 530 人 10.6%であった。

Q 9 エイズ検査結果の非通知について、「知っている」が 3,200 人（64.0%）、「知らせていると思った」が 1,039 人（20.8%）、
「そもそも検査していることを知らなかった」が 761 人（15.2%）であった。

Q 10 献血で感染症に感染しないことについて、「知っている」が 3,995 人（79.9%）、「知らない」が 1,005 人（20.1%）
であった。

Q 11 血液製剤を未だ海外血液に依存していることについ
て、「知っている」が 1,540 人（30.8%）で、「知らない」が 3,460 人（69.2%）であった。

Q 12 献血ルームの雰囲気について、「ふつう」が 2,479 人（49.6%）、「明るい」が 2,106 人（42.1%）、「暗い」が 415 人（8.3%）であった。

献血ルームの広さについて、「ふつう」が 2,728 人（54.6%）、「狭い」が 1,225 人（24.5%）、「広い」が 1,047 人（20.9%）であった。

献血ルームの職員の対応について、「ふつう」が 2,875 人（57.5%）、「良い」が 1,890 人（37.8%）、「悪い」が 235 人（4.7%）であった。

献血ルームの処遇（記念品や軽い飲食物）について、「ふつう」が 2,576 人（51.5%）、「良い」が 1,836 人（36.7%）、「悪い」が 588 人（11.8%）であった。

■ 献血を行った時期やきっかけ

現在、献血する理由（大きい順の3つまでの計）は、「自分の血液が役に立ってほしいから」が 3,367 人（67.3%）、次いで「輸血用の血液が不足していると聞いたから」が 2,382 人（47.6%）、「自分の血液の検査結果が自分の健康管理のためになるから」が 2,064 人（41.3%）であった。

Q 1 5 初めて献血した年齢は、「16～17歳」が 1,728 人（34.6%）、「18～19歳」が 1,528 人（30.6%）で、10代での献血が全体の6割を超えていた。

Q 1 6 初めて献血した場所は、「献血バス」が 1,856 人（37.1%）、次いで「献血ルーム」が 1,629 人（32.6%）、「高校での集団献血」が 1,131 人（22.6%）であった。

Q 1 7 初めての献血の種類は、「200ml献血」が最も多く 3,117 人（62.3%）で、「400ml献血」が 946 人（18.9%）、「成分献血」が 276 人（5.5%）であった。

Q 1 8 過去1年間の献血回数は、

200ml献血では、「1回」が 1,115 人（22.3%）、「2回」が 435 人（8.7%）、「3回」が 244 人（4.9%）、「4～6回」が 231 人（4.6%）で、2回以上の合計は 910 人（18.2%）であった。

400ml献血では、「1回」が 831 人（16.6%）、「2回」が 317 人（6.3%）、「3回」が 171 人（3.4%）で、2回以上の合計は 488 人（9.8%）であった。

成分献血では、「1回」が 386 人（7.7%）、「2回」が 170 人（3.4%）、「3回」が 106 人（2.1%）、「4回以上」が 278 人（5.6%）で、2回以上の合計は 554 人（11.1%）であった。

Q 1 9 今までの合計献血回数は、「1回」が 1,409 人（28.2%）、次いで「3～5回」が 1,363 人（27.3%）、「2回」が 813 人（16.3%）で、全体の7割以上が複数回の献血者であった。

Q 2 0 初めて献血した際のきっかけとして 1 番目に挙げられたもののうち最も回答が多かったのは、「自分の血液が役に立ってほしいから」の 1,686 人（33.7%）であった。

Q 2 1 現在、献血する理由として 1 番目に挙げられたもののうち最も回答が多かったのは、「自分の血液が役に立ってほしいから」の 2,196 人（43.9%）であった。

また、献血する理由を 3 つまで列挙してもらい、その中で挙げられた理由について見ると、「自分の血液が役に立ってほしいから」が 3,367 人（67.3%）、次いで「輸血用の血液が不足していると聞いたから」が 2,382 人（47.6%）、「自分の血液の検査結果が自分の健康管理のためになるから」が 2,064 人（41.3%）であった。

Q 2 2 高校での集団献血がその後の動機付けとなっているかについては、「どちらかといえば有効」が 2,274 人（45.5%）、「非常に有効」が 1,022 人（20.4%）で、有効であるとの評価が全体の 7 割弱を占めていた。

■ その他

Q 1 4 献血についての要望・知りたいことについて、「献血について正しい知識、必要性を知らせてほしい」が 2,116 人（42.3%）で、次いで「献血したときの処遇品（記念品）をもっと良くしてほしい」が 2,101 人（42.0%）、「献血する場所、日時などについて十分知らせてほしい」が 1,933 人（38.7%）であった。（複数回答）